大学生における同一性（identity）の形成と友人関係との関連

神田　直樹
（伊原千晶ゼミ）

問　題

ライフサイクルにわたる人間の発達過程を理論化したErikson，E．H．は，青年期には同一性の達成が発達課題の中心になると述べた。同一性とは，Eriksonの定義によると，「私は他の誰とも違う独自の存在であり続け（自己の斉一性)」，「過去，現在，そしてこれからもずっと私であり続け(時間的な連続性と一貫性)」，「なんらかの社会集団に所属し，そこに一体感を持つとともに，他の成員からも是認されている（帰属性)」という主体的な感覚のことを指す。青年期には，知的，情緒的，生理的に大きな変化を迎えると同時に，社会的環境の変化，社会からの期待や要望の変化を体験することで，「自分とは何か」という問いにぶつかりやすくなる。例えば，進路，就職，友人関係，結婚など，自分の生き方について意思決定をしなくてはならない場面が，幾度となく訪れる。このような場面を乗り越え，「これこそが他ならぬ自分である」と確信し，「この自分でよい」という自己肯定感と「これからもこの自分でやっていける」という自信ができ，さらには「この自分は社会から受け入れられ，根づいている」という感覚をもつことができたとき，同一性が達成されたといえる。しかし，標準的なライフコースの崩れた現代社会では，従来の青年期のうちに同一性を達成している青年は数少ない。そのため，現代では年齢的にはEriksonのライフサイクル論における成人期の段階にありながら，同一性の達成が行われていないという引き延ばされた青年期の存在がある。そもそも，Eriksonの定義による主体的な感覚とは，たとえば子どもが歩けるようになった時に，子どもの内的な達成感とそれに対する親の評価とが相互に反応しあい，そこに自分が社会において有意義なパーソナリティを発達させたのだという感覚が生まれるというようなことである。このことから同一性の形成において他者との関係性が重要であるといえる。また，Eriksonの発達理論が心理・「社会」的理論と呼ばれていることからも，同一性の形成において他者との関係性が重要であるということが分かる。なぜならば，Eriksonが述べる「社会」は，国家や文化といった大規模なものから，重要な他者という小規模なものまで幅広い内容を含むからである。

鑪（1990）は，一見すると同一性が達成されたように見える人でも，まだ本当の意味で同一性が達成されていない人の同一性のことを「偽りのアイデンティティ」と呼び，その特徴として表面的な対人関係しか持てないことを指摘している。この他にも，同一性の達成という一側面のみで，現代青年の質的な変化に対応するには不十分であるため，もう１つの質的な変化である対人関係における他者との親密性との関連性についての実証的な研究が現れてきた。本研究では，このような現代青年の２つの質的な変化についての関連性を見る。

先行研究において，同一性と友人関係との関連を直接扱ったものは，宮下・渡辺（1992)，白鳥・清水（2001)，金子（1991)，などの研究しかなかった。これらの研究では同一性の形成には親密な他者の存在が重要であるという結果が示されていた。また，同年輩集団という観点からの級友関係と同一性との関連については金子（1992）の研究があった。この研究では，自己と他者の関係において，「違い意識」，「左右されやすさ」，「距離をおくこと」の３因子と同一性との関連性を検討した結果，

「左右されやすさ」や「距離をおくこと」が強い青年ほど「私は誰？」というような同一性拡散の感覚が強く，「違い意識」がある青年ほど「自分への確信」がしっかりしているということが明らかになっており，また親友だけではなく半知り状態の他者との関係も同一性の形成に影響を与えているという結果が示されていた。この他にも「集団への関わり方」・「友人関係」と同一性との関連を性差を中心に扱った大野（1998）の研究がある。そこでは，男性の同一性形成には集団への帰属意識や友人は影響を与えず，女性だけが影響を受けるという結果が示された。

たしかに，これまで女性においては他者との関係性が重要なので，同一性形成は親密性の獲得と並行して起こると考えられてきた。しかし，杉村(1998）は同一性形成と他者との関係性の関連における性差は，同一性形成の際の関係性の利用の仕方における程度や質の問題だと考えた。例えば，男性は他者に勝ちたいという欲求が高い人ほど同一性の感覚を持っているのに対して，女性は逆の傾向を示していた。これは男性の同一性形成においては関係性が重要でないことを意味するのではなく，男性は他者との競争，女性は愛着と親和というように，関係性の中でも重要な側面が異なるということを意味すると解釈すべきである。したがって，男女ともに他者との関係性が同一性形成に大きな影響を与えるということが推測される。また，いずれの研究においても同一性を「拡散」と「達成」とを両極とする1次元で表わされる質問紙を用いてその状態を測定していた。しかし，現代青年の同一性を「拡散」と「達成」とを両極とする１次元で分類することは好ましくないとした加藤（1983）は，Marcia，J．E．の同一性地位の概念に基づき，「拡散」と「達成」の間の同一性の状態を質問紙法によって測定しようとした。Marciaの同一性地位概念とは，Eriksonの同一性概念をより具体的に捉えるために考案されたものである。Marciaは，同一性のあり様は「危機（crisis)」と「自己投入（commitment，積極的関与，傾倒とも訳される)」によって決まると考えた。つまり，「危機」とは自分にとって意味のあるいくつかの可能性の中から１つを選ぼうと悩み，意思決定を行うことを指し，「自己投入」とは，選んだものに対して積極的にかかわろうとする姿勢のことである。Marciaは，この両者を経験しているか否かを半構造化面接によって測定し，その結果，以下のような４つの同一性地位（identity status）を見出した。

① 同一性達成：幼児期からのあり方について確信がなくなり，いくつかの可能性について本気で考えた末，自分自身の解決に達して，それに基づいて行動している。
② モラトリアム：いくつかの選択肢について迷っているところで，その不確かさを克服しようと一生懸命努力している。
③ 早期完了：自分の目標と親の目標の間に不協和がない。どんな体験も，幼児期以来の信念を補強するだけになっている。硬さ（融通のきかなさ）が特徴的である。
④ 同一性拡散：本当の自分を感じることができず，生きていくことに混乱している状態。これには２つの型がある。
  ⑴ 危機前拡散：危機に直面した経験がなく，社会における自分の役割や信念が不明確で，責任ある行動を求められると動揺する状態。
  ⑵ 危機後拡散：何らかの危機は経験しているが，積極的に物事に関与しようとはせず，全てのことを放置してしまっている状態。

加藤（1983）は，このような同一性地位概念をもとにして，同一性の状態を客観的に測定するための質問紙を作成した。

次に，現代青年の友人関係の特徴として人間関係の希薄化や，親友とのつきあい方の変化が指摘されている（土井，2004)。かつての「親友」が，自分の率直な思いをストレートにぶつけることのできる相手だったのに対して，昨今の「親友」とは，互いに傷つかないように深入りしないようにしていないと良好な関係が保てないと言われている。このような現代青年の親友との距離の取り方は，どこかよそよそしく，他人行儀なものに感じられる。しかし，このことは，現代青年にとっての親友という存在が以前ほどには重要でなくなっているということを意味するわけではない。むしろその逆で，以前よりもその存在がはるかに重た

くなってきているからこそ，相手を傷つけないようにお互い必死に相手を気遣っているのである。このような現代青年の友人関係の特徴について岡田（1995）は大学生の友人関係には，集団で表面的な面白さを志向する「群れ関係群」，友人に気を遣いながら関わる「気遣い関係群」，深い関係を避ける「関係回避群」があることを見出している。この他にも長沼・落合（1998）などは，青年の友達との付き合い方を16因子抽出し，「浅い－深い」，「広い－狭い」という２つの軸を用いて二次因子を抽出している。また，落合・佐藤（1996）は自由記述法を用いて友達とのつきあい方を6因子抽出している。小塩（1998）は友人関係を調べる際に岡田（1993）の友人関係様式に関する項目を一部修正して用いていた。しかし，いずれの研究でも共通していることは，友達とのつきあい方を表す「浅い－深い」，「広い－狭い」という2つの軸を用いていることである。これらの研究では異なる方法で測定・分析，あるいは異なる尺度を用いて調査・分析が行われているが，得られる因子はほぼ同様の意味の因子であることが分かっている。また，「浅い－深い」，「広い－狭い」の2軸はこれらの研究で二次因子分析によって因子間の相関がほとんどなく，それぞれ独立した次元であることが示されている。落合・佐藤（1996）は，青年期における友達とのつきあい方の発達的変化を調べた結果，まず浅いつきあい方から深いつきあい方へと変化し，次に広いつきあい方から狭いつきあい方へと変化することを示した。これらの研究から，友人関係の分類については「浅い－深い」，「広い－狭い」の２軸を用いての分類が有効であると考えられる。また，この２軸を用いて分類される友達とのつきあい方は「浅く広くかかわるつきあい方」，「浅く狭くかかわるつきあい方」，「深く広くかかわるつきあい方」，「深く狭くかかわるつきあい方」の４パターンである。友人関係を調べる際には，このような２軸を用いた分類が有効であるにもかかわらず，先行研究においては同一性との関連を調べる際に用いられていなかった。よって本研究では，同一性地位による同一性の達成状況と「浅い－深い」，「広い－狭い」の2軸を用いた友人関係の関連について調べることとした。

目　的

これまでの研究では，現代青年の同一性の形成と友人関係の関連について研究したものは，いずれも同一性を「拡散」と「達成」とを両極とする1次元と友人関係について調べた研究がほとんどで，「拡散」と「達成」の間の同一性の状態と友人関係を調べた研究はほとんど見当たらなかった。そこで本研究では，同一性の形成をMarciaが提示した同一性地位概念に基づいて，友人関係との関連を調べるものとした。また，それにより先行研究の結果との違いがないかを比較することとした。

方　法

調査対象　K大学に所属している大学生を対象として質問紙調査を実施した。調査対象者の合計は120名であった。記入漏れのあったデータについては使用しなかったため，有効回答数は98名（男性71名，女性27名，平均年齢20.34歳）であった。有効回答率は82%であった。

調査期間　2007年11月26日～12月8日

質問紙

⑴　同一性を測定する質問紙

同一性を測定する質問項目については，先行研究で用いられたアイデンティティ・ステイタス尺度（加藤　1983）を使用した。この尺度は，Marciaが開発した同一性地位の概念に基づいており，「現在の自己投入（４項目)」，「過去の危機（４項目)」，「将来の自己投入の希求（４項目)」の３つの下位尺度から成り立っている。これら全12項目の質問項目から危機と傾倒を得点化し，その得点によって同一性を測定するものである。また，各下位尺度の得点水準は加藤（1983）の研究にしたがって「20点（かなりある［かなりあった]），14点（ある［あった］ともない［なかった］ともいえない），12点（どちらかといえばない［なかった])」とし，この水準を基準として同一性の分類を行った。

⑵　友人関係を測定する質問紙

友人関係を測定する質問紙は，「浅い（防衛的

関与）－深い（積極的関与)」と「広い（全方向的）－狭い（選択的)」の２次元で表されている，落合・佐藤（1996）の友達とのつきあい方に関する質問紙を使用した。この質問紙は，友達とのつきあい方について，青年に自由記述を求め，それを参考にして作成されたものである。この質問紙は，６種類の友達とのつきあい方を問う質問項目から成り立っており，それぞれ「本音を出さない自己防衛的なつきあい方（以下，防衛的と略記する)」，「誰とでも仲良くしていたいというつきあい方（以下，全方位的と略記する)」，「自分に自信を持って交友する自立したつきあい方（以下，自己自信と略記する)」，「自己開示し積極的に相互理解しようとするつきあい方（以下，積極的相互理解と略記する)」，「みんなと同じようにしようとするつきあい方（以下，同調と略記する)」，「みんなから好かれることを願っているつきあい方（以下，被愛願望と略記する)」となっている。なお，アイデンティティ・ステイタス尺度，友達とのつきあい方に関する質問紙ともに資料として，実際に調査で使用した質問紙を添付した。

結　　果

⑴　アイデンティティ・ステイタス尺度の分析

アイデンティティ・ステイタス尺度の回答は６件法で求め，各項目への回答に対して1～6点を「まったくそのとおりだ（６点)」～「全然そうではない（１点)」のように各項目に与えた。ただし，逆転項目の場合は評定点を逆転させたので「まったくそのとおりだ（１点)」～「全然そうではない（６点)」とし，各項目に得点を与えた後でアイデンティティ・ステイタス尺度を，それぞれ「現在の自己投入」，「過去の危機」，「将来の自己投入の希求」の3つの下位尺度ごとに合計得点を算出し，図1の流れ図にしたがって分類を行った。以下に分類した同一性地位の定義を述べる。

① 同一性達成地位（A)：過去に高い水準の危機を経験した上で，現在高い水準の自己投入を行っている者。

② 同一性達成－権威受容中間地位（A－F中間地位)：中程度の危機を経験した上で，現在高い水準の自己投入を行っている者。

③ 権威受容地位（F)：過去に低い水準の危機しか経験せず，現在高い水準の自己投入を行っている者。

④ 積極的モラトリアム地位（M)：現在は高い水準の自己投入は行っていないが，将来の自己投入を強く求めている者。

⑤ 同一性拡散－積極的モラトリアム中間地位(D－M中間地位)：現在の自己投入の水準が中程度以下の者のうちで，その現在の自己投入の水準が同一性拡散地位ほどには低くないが，将来の自己投入の希求の水準が積極的モラトリアム地位ほどには高くない者。

⑥ 同一性拡散地位（D)：現在低い水準の自己投入しか行っておらず，将来の自己投入の希求も弱い者。

この６つの同一性地位に分類した後に，調査対象者全体における下位尺度の平均得点と標準偏差を求めた（表１)。これは，加藤（1983）の先行研究では，下位尺度の平均得点と標準偏差に性差が見られなかったからである。また，本研究では加藤（1983）の先行研究と同様に，各同一性地位の人数のばらつきが大きかったため，A－FとFを併せてF'とし全体で５類型に整理した。なお，各同一性地位の人数は表2に示した。

表１　尺度得点の平均値

	平均得点	標準偏差
現在の自己投入	16.1	4.3
過去の危機	17.8	3.5
将来の自己投入の希求	15.6	3.3

表２　各同一性地位の人数

同一性達成	A–F 中間	権威受容	積極的モラトリアム	D–M 中間	同一性拡散	合計
10	2	14	17	42	13	98

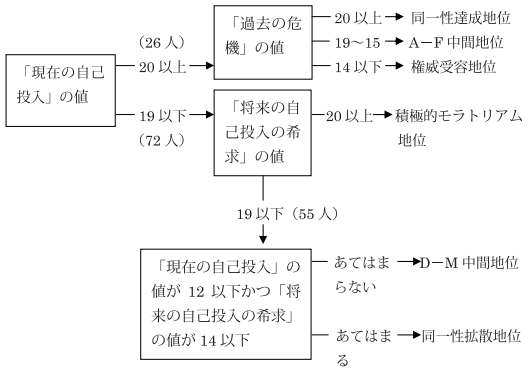

図１　各同一性地位への分類の流れ図(加藤,1983)

⑵　友達とのつきあい方に関する質問紙の分析

友達とのつきあい方に関する質問紙への回答は５件法で求め，各項目への回答に対して１～５点を「非常にあてはまる（５点)」～「まったくあてはまらない（１点)」とした。また，逆転項目の場合は「非常にあてはまる（１点)」～「まったくあてはまらない（５点)」と評定点を逆転させて加算した。そして，調査対象者全体の回答をデータ行列として，友達とのつきあいに関する質問紙の全35項目に対して一次因子分析を行い，共通性を反復推定し主因子法による初期解を求めた。落合・佐藤（1996）の研究と同様に因子数８から順次因子数を減らし，Promax解を求めたところ単純構造をなし，解釈が可能である因子とした６因子解が最適解となった。そこで先行研究同様，本研究でも因子数を6に決定し，Promax回転を行った。このときの寄与率は57.3%であった。また，落合・佐藤（1996）の研究では，６因子の抽出順や因子負荷量の高い項目は，男女別の分析結果と全体の結果は，ほぼ同様であった。したがって，本研究でも，男女を分けずに分析を行った。得られた因子パターン行列を表３に示す。因子の解釈に用いる項目は，因子負荷量が.35以上の項目を基準とした。各因子は以下のように解釈した。

第１因子の代表項目として，負荷量の高い項目を挙げると，次のようである。「友達とは本音で話さないほうが無難だ（.82)」，「友達にはありのままの自分は出せない（.79)」，「友達に自分のすべてをさらけ出すのは危険である（.78)」。これは，自分の内面や本音を表に出せない防衛的なかかわり方と解釈したため，落合・佐藤（1996）と同様に「防衛的」因子と命名した。第２因子に関して，因子負荷量の高い項目を挙げると，次のようである。「どんな友達とも仲良しでいたい(.91)」，「どんな友達とも楽しくつきあいたい（.87)」。これは，どの人とも同じように仲良くつきあっていたいというかかわり方と解釈したため，この因子についても落合・佐藤（1996）と同様に「全方位的」と命名した。第3因子に高い因子負荷量を示した項目は，「友達と意見や考えがくいちがっても自信をなくしたりしない（.89)」，「友達と意見が対立しても，自信を無くさないで話し合える(.76)」などである。この因子は自分の価値観をお互いに言い合っても，迷ったり自信を無くしたりしないで，友達とつきあっていたいというかかわり方と解釈したため，この因子についても落合・佐藤（1996）と同様に「自己自信」と命名した。第４因子に関して，高い因子負荷量を示した項目は，「友達と本音を言い合うことで傷ついても仕方ない（.72)」，「友達とは少しくらい傷ついても本当のことを言い合いたい（.65)」などである。この因子は，たとえ傷ついても友達には本音でつきあいたいとするかかわり方と解釈したため，この因子についても落合・佐藤（1996）と同様に「積極的相互理解」と命名した。第5因子について高い因子負荷量を示した項目は，「みんなと何でも同じでいたい（.71)」，「みんなと意見を合わせ

表３　友達とのつきあい方に関する質問項目の因子パターン行列（Promax回転後）

項目番号	防衛的	全方位的	自己自信	積極的相互理解	同調	被愛願望
項目 1	**.82**	−.17	.02	.10	.06	.01
項目 15	**.78**	−.06	.09	.14	.01	−.01
項目 23	**.63**	.05	−.06	.08	.03	−.08
項目 27	**.80**	.02	.01	−.01	.09	.02
項目 28	**.41**	.07	.03	.09	.12	.04
項目 31	**.54**	.01	−.03	−.01	.14	.07
項目 19	**−.75**	.00	−.05	.25	.01	.00
項目 13	**.59**	.01	−.08	.06	.03	.01
項目 11	**.53**	−.02	.01	.18	.05	.00
項目 14	**.35**	.03	−.03	−.03	−.07	.01
項目 18	**−.61**	−.05	.00	.25	.01	.04
項目 24	**.36**	.00	−.02	−.21	.05	.06
項目 29	.29	.01	−.01	.23	−.07	−.02
項目 2	.00	**.91**	.03	.00	−.01	−.03
項目 7	.02	**.87**	.09	.03	.01	.01
項目 12	−.01	**.76**	.06	.06	.02	.02
項目 35	.03	**.81**	.06	.05	.08	−.01
項目 30	−.04	**.76**	−.07	−.04	.05	−.02
項目 16	.00	**−.41**	−.02	.08	.06	−.06
項目 3	.20	.03	**.76**	.09	.01	.04
項目 6	.19	.01	**.89**	−.06	.00	.01
項目 25	.18	.00	**.56**	.01	−.05	.12
項目 9	.04	.06	**.60**	.06	.02	.09
項目 33	.08	.01	**.73**	.02	−.01	.13
項目 21	.09	−.07	**−.67**	.07	.05	.08
項目 4	.16	.00	.09	**.64**	−.03	.07
項目 17	−.19	−.02	.00	**.72**	−.01	.06
項目 34	−.18	.07	.03	**.53**	−.13	.21
項目 22	−.23	.04	−.03	**.65**	.01	.19
項目 5	.00	−.01	.01	−.04	**.71**	.06
項目 8	.11	−.02	−.02	−.03	**.61**	.03
項目 26	.10	.01	−.10	.03	**.63**	.07
項目 32	.08	.01	.26	.05	−.34	.14
項目 10	−.27	.03	.03	−.03	.04	**.42**
項目 20	−.17	.05	.04	−.01	.06	**.56**

注．項目内容は資料のⅡを参照

ようと思う（.63)」などであった。この因子はまわりの友達と同じでいたいとするかかわり方と解釈したため，落合・佐藤（1996）と同様に「同調」と命名した。第６因子に関して，高い因子負荷量を示した項目は，「みんなから好かれていたい(.56)」，「みんなから愛されていたい（.42)」であった。この因子は，友達から好かれていたいというかかわり方と解釈したため，この因子も落合・佐藤（1996）と同様に「被愛願望」と命名した。

さらに，この６因子を「浅い（防衛的関与）－深い（積極的関与)」を表す軸と，「広い（全方向的）－狭い（選択的)」を表す軸の２つの次元に分類するため，二次因子分析を行った。正の固有値までを因子数決定の基準として，２因子を抽出し，Promax回転を行った。寄与率は54％であった。因子パターンは表4に示した。

表４　友達とのつきあい方に関する二次因子パターン行列（Promax回転後）

	第Ⅰ二次因子	第Ⅱ二次因子
自己自信	**.74**	−.33
積極的相互理解	**.69**	−.14
防衛的	**−.80**	−.17
全方位的	.03	**.88**
被愛願望	−.02	**.58**
同調	−.34	**.39**

その結果，「浅い（防衛的関与）－深い（積極的関与)」の軸には「防衛的」，「積極的相互理解」，「自己自信」の一次因子が，「広い（全方向的）－狭い（選択的)」の軸には「全方向的」，「同調」，「被愛願望」がそれぞれ当てはまった。また，「浅い（防衛的関与）－深い（積極的関与)」の軸は「人とのかかわり方に関する姿勢」を表しており，「広い（全方向的）－狭い（選択的)」という軸は「自分がかかわろうとする相手の範囲」を表している。そして，「人とのかかわり方に関する姿勢」と「自分がかかわろうとする相手の範囲」の二次因子得点をもとに，クラスター分析を行った。これにより，「浅い（防衛的関与）－深い（積極的関与)」の軸と「広い（全方向的）－狭い（選択的)」の軸の２次元で友達とのつきあい方を分類した。以下にそのパターンを示す。

① 浅く広くかかわるつきあい方：これは，誰とでも同じように仲良くしようとしているが，自分の本音を出さずに友達とつきあうというつきあい方である。

② 浅く狭くかかわるつきあい方：これは，自分の本音は出さず限られた人とだけつきあおうとするつきあい方である。

③ 深く広くかかわるつきあい方：これは，誰とでもつきあおうとし，誰からも好かれ愛されようとする。そして，お互いにありのままの自己を積極的に開示しあい，わかりあおうとするつきあい方である。

④ 深く狭くかかわるつきあい方：これは，限られた相手と積極的にかかわり，わかりあおうとするつきあい方である。

クラスター分析の結果，以上の４パターンに分類した。各パターンの人数は，表５の通りである。

表５　友達とのつきあい方の人数

浅く広く	浅く狭く	深く広く	深く狭く	合計
31	13	28	26	98

⑶　同一性の形成と友人関係の関連

⑴，⑵で算出した２つの尺度を用いて同一性の形成と友人関係の関係性を算出した。同一性地位について友達とのつきあい方の４パターンによる一要因の分散分析を行った結果（表６，図２），「同一性地位」と「友達のつきあい方の4パターン」との間に有意な差が見られた（$F(3,95)=2.72, p<.05$)。また，その後の多重比較では「深く狭くかかわるつきあい方」が「浅く広くかかわるつきあい方」($p<.05$) より有意に高かった。同様に，友人とのつきあい方に関する質問紙で得られた一次因子と二次因子についても同一性地位による一要因の分散分析を行った（表７，図３，表８，図４)。その結果，一次因子では，「自己自信」因子($F(5,93)=2.54, p<.05$) と「積極的相互理解」因子（$F(5,93)=2.47, p<.05$) と「防衛的」因子（$F(5,93)=2.32, p<.05$) と「同調」因子（$F(5,93)=1.94, p<.10$) で有意な差が見られた。また，その後行った多重比較の結果，「自己自信」因子では，同一性達成地位とF'がD－M中間地位($p<.05$) と同一性拡散地位（$p<.05$) より有意に高かった。同様に，「積極的相互理解」因子においても，同一性達成地位とF'がD－M中間地位

（p＜.05）と同一性拡散地位（p＜.05）より有意に高かった。逆に，「防衛的」因子では，同一性拡散地位が同一性達成地位（p＜.05）とF'（p＜.05）より有意に高かった。また，「同調」因子でも，同一性拡散地位が同一性達成地位（p＜.05）よりも有意に高かった。次に，二次因子では，「人とのかかわり方に関する姿勢」因子にだけ有意な差が見られた（F(5,93)＝2.51,p＜.05)。また，多重比較の結果，同一性達成地位とF'と積極的モラトリアム地位とD－M中間地位が同一性拡散地位（p＜.05）より有意に高かった。

表６　友達とのつきあい方の４パターンによる同一性地位についての分散分析

	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
グループ間	16.268	3	5.423	2.716	.049*
グループ内	187.651	95	1.996		
合計	203.918	98			

*.5%水準で有意

表７　同一性地位による6種類の友達とのつきあい方についての分散分析

		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
防衛的	グループ間	8.038	5	1.608	2.615	.039*
	グループ内	80.868	93	.879		
	合計	88.905	98			
積極的相互理解	グループ間	5.856	5	1.171	2.418	.041*
	グループ内	77.257	93	.840		
	合計	83.113	98			
自己自信	グループ間	7.507	5	1.501	2.736	.032*
	グループ内	76.671	93	.833		
	合計	84.178	98			
全方位的	グループ間	3.341	5	.668	.716	.613
	グループ内	85.877	93	.933		
	合計	89.218	98			
被愛願望	グループ間	3.169	5	.634	.843	.523
	グループ内	69.164	93	.752		
	合計	72.333	98			
同調	グループ間	4.934	5	.987	1.913	.097**
	グループ内	76.627	93	.833		
	合計	81.561	98			

*.5%水準で有意
**.10%水準で有意

表８　同一性地位による友達とのつきあい方を構成する二次因子についての分散分析

		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
人とのかかわり方に関する姿勢	グループ間	11.736	5	2.347	2.505	.036*
	グループ内	86.214	93	.937		
	合計	97.950	98			
自分がかかわろうとする相手の範囲	グループ間	3.457	5	.691	.673	.645
	グループ内	94.481	93	1.027		
	合計	97.938	98			

*.5%水準で有意

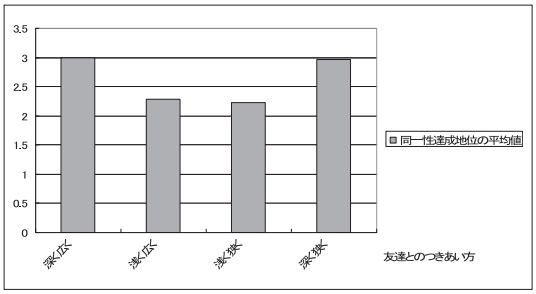

図２　友達とのつきあい方の４パターン別同一性達成地位の平均値

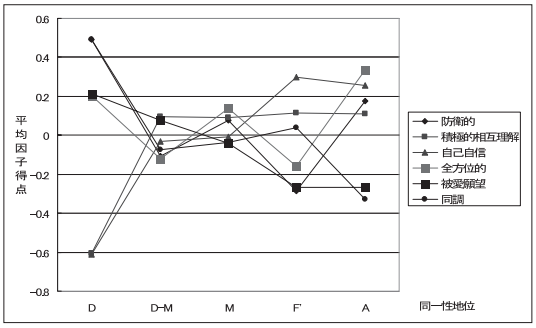

図３　各一次因子の同一性地位別平均因子得点

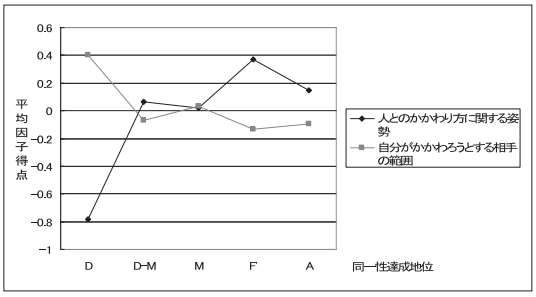

図４　各二次因子の同一性地位別平均因子得点

考　　察

まず，現代青年の同一性の形成についてであるが，本研究ではMarciaの同一性地位概念に基づいて作成された加藤（1983）のアイデンティティ・ステイタス尺度を用いて，「拡散」と「達成」の間の同一性の状態を調べた。その結果D－M中間地位が半数を占めていた。これは，加藤の分類方法にしたがって行った結果生じたものであると思われる。それは，分類のための水準が若干高いためである。そのためこの水準については今後なんらかの変更が必要なのではないかと思われる。しかし，その欠点を抜きにしても各下位尺度の合計

の平均が加藤（1983）の研究（現在の自己投入の平均：17.2，過去の危機：17.8，将来の自己投入の希求：17.5）よりも下回っていたのは現代青年の大きな特徴であるといえる。それは「現在の自己投入」と「将来の自己投入の希求」の２つの平均値が下がっていることで説明できる。「過去の危機」の平均値は変わっていないので，危機を経験する場面は昔と変わっていないことがわかる。しかし，「現在の自己投入」と「将来の自己投入の希求」については，人生の選択肢の幅が広がった現代の特徴を表わしている。選択肢が増えたことによってどれか1つを選ぶことに昔以上に長い期間をかけなければならなくなってしまっているためだと思われる。

次に友人関係についてだが，落合・佐藤（1996）は友達とのつきあい方の4パターンを「浅く広くかかわるつきあい方」から「深く狭くかかわるつきあい方」へと年齢を増すにつれて変わっていき，その途中で，「深く広くかかわるつきあい方」が多くなってくると述べている。つまり，最初は浅いつきあい方から深いつきあい方へと「人とかかわる姿勢」が変化し，次に広いつきあい方から狭いつきあい方へという「かかわろうとする相手の範囲」の変化が起こると述べている。このことから考えると従来のライフサイクルであれば，「浅く広くかかわるつきあい方」の人数が減少するはずだが，今回の調査対象である大学生においては友達とのつきあい方の４パターンの人数比では，このパターンの人数が多かった。このことはなかなか本音を出せないでつきあっている青年が増えているのが原因と考えられる。

現代青年の同一性と友人関係についての関連性について見てみると，同一性の形成には，「深く狭くかかわるつきあい方」が関係しているという結果が示されていた。これは，従来の青年心理学における青年期の友人関係の記述と同様で，特定の他者と親密な関係を持つことが同一性の形成に重要であることを示している。しかし今回の調査では，「浅く広くかかわるつきあい方」の人数が1番多かった。このことは，上述したように内面を見せないで友達とつきあっている青年が増えているためだと思われる。このような現代青年の特徴について岡田（1993）は，現代青年の友人とのかかわり方について３種類のかかわり方を見出している。１つ目は相手と距離をおいたつきあい方をする「対人退却傾向」，２つ目は深刻さを避け楽しさを志向する「群れ志向」，３つ目は親密さを求め，傷つけないよう気を使う「やさしさ志向」である。そして，この中の「やさしさ志向」は従来の青年心理学おける青年期の友人関係に近い特徴を持っていることを明らかにした。しかし，この「やさしさ志向」的かかわり方には，「相手に甘えすぎない」，「互いに傷つけないように気を使う」，「相手の考えていることに気を使う」などの項目を含んでいたために岡田（1993）は２通りの解釈を示した。1つは，従来型の青年においても互いの内面に踏み込んだり，傷つけあったり，甘えすぎることを回避する防衛的友人関係の側面が顕在化しつつあるとするもので，もう１つは，互いを別個の人格として認めあった上での親密さをこの群が発達させているとするものである。これは，土井（2004）も指摘している現代青年の友人関係あるいは親密性の質的な変化を表わしている。つまり，友達と親密な関係を持っている青年においても防衛的なかかわり方をする側面があり，相手を気遣うあまりに防衛的なつきあい方をしている青年がいることを示唆している。しかし，本研究で得られた結果は，同一性の形成には依然として従来の青年心理学の記述通り，親密な他者の存在が重要であることを示している。また，アイデンティティ・ステイタス尺度と友達とのつきあい方に関する質問紙の一次因子，二次因子との関係について見ると，「人とのかかわり方に関する姿勢」は同一性の形成に影響を与えていると示されていた。これは，他者と深いつきあいをしている人ほど同一性達成地位に近く，逆に浅いつきあいをしている人ほど同一性拡散地位に近いということを示している。このことから，「浅い（防衛的関与）－深い（積極的関与）」の軸は，同一性の形成に関連があるが，「広い（全方向的）－狭い（選択的）」の軸は，同一性の形成には関連がないことが分かった。また，一次因子においても，「自己自信」と「積極的相互理解」は同一性の形成に関連があるが，逆に「防衛的」と「同調」は同一性の形成には関連がないことが示されていた。これは，友人との価値観の違いに迷ったり悩んだ

りせずに，自分に自信を持っている人や，友人と互いに分かり合おうと積極的に自己開示する人ほど，同一性の達成につながるということである。逆に，友人に対して自分の本音を出さず，表面的なつきあいしかしない人や，周りの人と常に同じでいようとしている人は，同一性拡散につながるということである。これは，金子（1995）が行った研究とほぼ同様の意味の研究結果である。金子(1995）の研究における「違い意識」は，本研究における「自己自信」とほぼ同様の意味であり，「左右されやすさ」は「自己自信」の対極あるいは「同調」とほぼ同様の意味であり，「距離をおくこと」は「防衛的」とほぼ同様の意味である。

次に，本研究では友人関係について焦点を絞ったが，宮下・渡辺（1992）の行った研究では，青年期の同一性と対人関係（友人関係，父親との関係，母親との関係，教師との関係）の関連について研究していた。この研究結果では，男性は両親との関係，とりわけ父親との関係が同一性の形成には最も重要であるという結果が示されていた。一方，女性は友人関係が同一性の形成に最も重要であるという結果が示されていた。また，大野(1998）の研究でも宮下・渡辺（1992）の研究結果と同様の結果が示されている。大野（1998）は「集団のかかわり方」および「友人関係」と同一性の形成との関連について調べていた。その結果，男性は集団内における活動に傾倒していることが，女性は集団に対して帰属意識を持っていることが，それぞれ同一性の形成に重要であると示されていた。また，友人関係については，女性のみが関連性があると示されていた。女性はどんなに親しい友人であっても，自分と友人は互いに独立した存在であるという感覚を持っていることが，同一性の形成に重要であると示していた。しかし，杉村(1998）は，同一性の形成を関係性の観点からとらえ直した研究を行っており，男女ともに友人との関係は同一性の形成に重要であるとしている。つまり，同一性と友人関係との関連において，性差があるのは関係性の側面が違うからであって，男女ともに友人との関係性は同一性の形成において重要であると示していた。

本研究と同様の結果を示していた先行研究は，金子（1995）だけであった。しかし，宮下・渡辺(1992）も大野（1998）も同一性と友人関係のみに焦点を絞った研究ではなく，両研究とも情報量が圧倒的に少なかったため，さらに発展させた形の研究が必要だと思われる。また，杉村（1998）も関係性の観点をとらえ直していたが，それを実証的に研究していないので，実証的に研究できる方法を考案する必要があるように思われる。本研究では，同一性の形成と友人関係について研究を行った結果，同一性の形成と関連があるのは，「浅い（防衛的関与）－深い（積極的関与)」の軸のみで，「広い（全方向的）－狭い（選択的)」の軸は関連がないことが示された。しかし，アイデンティティ・ステイタス尺度はその分類基準上，大半がD－M中間地位になってしまうため分類基準あるいは尺度自体を発展させることが今後必要だと思われる。また，性差については，本研究では男女の人数比がかけ離れていたため行わなかったが，男女別に分析して性差を調べることも今後，必要に思われる。

引用・参考文献

土井隆義　2004　岩波ブックレット　633　「個性」を煽られる子どもたち－親密圏の変容を考える　岩波書店

金子俊子　1991　青年期女子の親子・友人関係における心理的距離の研究　青年心理学研究　第3巻　10－19

金子俊子　1995　青年期における他者との関係のしかたと自己同一性　発達心理学研究　第6巻　第2号　41－47

加藤　厚　1983　大学生における同一性の諸相とその構造　教育心理学研究　第31巻　第4号　292－302

小塩真司　1998　青年の自己愛傾向と自尊感情，友人関係のあり方との関連　日本教育心理学研究　第46巻　280－290

児美川孝一郎　2006　キャリアデザイン選書　若者とアイデンティティ　法政大学出版局

Kroger,J.　2005　アイデンティティの発達　青年期から成人期（榎本博明　編訳）北大路書房

Marcia，J．E．1966 Development and validation of ego identity status. *J .Personal.Soc.Psychol.*,3, 551－558

宮下一博・渡辺朝子　1992　青年期における自我同一性と友人関係　千葉大学教育学部研究紀要　第40巻　第1号　107－112
長沼恭子・落合良行　1998　同姓の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係　青年心理学研究　第10号　35－47
大野朝子　1998　青年の「集団への関わり方」および「友人関係」とアイデンティティ形成との関連　日本青年心理学会大会発表論文集　第6巻　40－41
岡田　努　1993　現代青年の友人関係に関する考察　青年心理学研究　第5号　43－55
岡田　努　1995　現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察　教育心理学研究　第43巻　第4号　354－363
落合良行・佐藤有耕　1996　青年期における友達とのつきあい方の発達的変化　教育心理学研究　第44巻　55－65
白鳥優子・清水紀子　2001　青年期女子のアイデンティティ形成と友人関係　日本教育心理学会第43回総会発表論文集　518
杉村和美　1998　青年期におけるアイデンティティの形成：関係性の観点からのとらえ直し　発達心理学研究　第9巻　第1号　45－55
鑪幹八郎　1990　アイデンティティの心理学　講談社
鑪幹八郎・岡本祐子・宮下一博（編）　2002　アイデンティティ研究の展望VI　ナカニシヤ出版

大学生の意識および友人関係に関する調査

この調査は、大学生の意識と、友人関係について調べようとするものです。いくつかの質問項目について記入上の注意を読んでお答えください。なお、この調査の結果は全て統計的に処理されますので、あなた個人の回答を問題にしたり、公表したりすることはありませんので、なるべく全ての質問に正直にお答え下さい。

ご協力よろしくお願いいたします。

性別（　男　・　女　）　年齢（　　）歳

調査者
京都学園大学　人間文化学部
人間関係学科
神田　直樹

I　以下の質問項目を読み、その内容が現在のあなたの気持ちや生き方にどのくらいあてはまるかを、次の１～６でお答え下さい。あてはまるところに○をつけて下さい。

１：全然そうではない
２：そうではない
３：どちらかといえばそうではない
４：どちらかといえばそうだ
５：かなりそうだ
６：まったくそのとおりだ

1. 私は今、自分の目標をなしとげるために努力している…1　2　3　4　5　6
2. 私は、環境に応じて、何をすることになっても特にかまわない
……1　2　3　4　5　6
3. 私はこれまで、自分について自主的に重大な決断をしたことはない
……1　2　3　4　5　6
4. 私には、自分がこの人生で何か意味あることができるとは思えない
……1　2　3　4　5　6

6. 私には、特にうちこむものはない……1　2　3　4　5　6
7. 私は、自分がどんな人間なのか、何をしたいのかということをかつて真剣に迷い考えたことがある……1　2　3　4　5　6
8. 私は、一生懸命にうちこめるものを積極的に捜し求めている……1　2　3　4　5　6
9. 私は、親やまわりの人間の期待にそった生き方をすることに疑問を感じたことはない……1　2　3　4　5　6
10. 私は以前、自分のそれまでの生き方に自信が持てなくなったことがある……1　2　3　4　5　6
11. 私は、自分がどんな人間で何を望み、行おうとしているのかを知っている……1　2　3　4　5　6
12. 私は、自分がどういう人間であり、何をしようとしているのかを、今いくつかの可能な選択を比べながら真剣に考えている……1　2　3　4　5　6

Ⅱ　以下の質問項目を読み、その内容が現在のあなたの友達とのつきあい方にどの程度あてはまるかを、次の１～５でお答え下さい。あてはまるところに○をつけて下さい。

１：まったくあてはまらない
２：あてはまらない
３：どちらともいえない
４：あてはまる
５：非常にあてはまる

1. 友達とは本音で話さないほうが無難だ……1　2　3　4　5
2. どんな友達とも仲良しでいたい……1　2　3　4　5
3. 友達と意見が対立しても、自信を無くさないで話し合える……1　2　3　4　5
4. 友達と分かり合おうとして傷ついても仕方ない……1　2　3　4　5
5. みんなと何でも同じでいたい……1　2　3　4　5
6. 友達と意見や考えがくいちがっても自信をなくしたりしない……1　2　3　4　5
7. どんな友達とも楽しくつきあいたい……1　2　3　4　5
8. みんなと違うことはしたくない……1　2　3　4　5
9. 友達と意見を交しあっても、それほどまどわされない……1　2　3　4　5
10. みんなから愛されていたい……1　2　3　4　5

11. 自信をなくされるくらいなら、友達とかかわらないほうがいい
……1　2　3　4　5
12. どんな人とも仲良くしようと思う……1　2　3　4　5
13. 友達には自分の考えていることを全部言う必要はない……1　2　3　4　5
14. みんなとぶつかり合うのは避けている……1　2　3　4　5
15. 友達に自分の全てをさらけ出すのは危険である……1　2　3　4　5
16. いやだなと思っている人とはつきあわないようにしている
……1　2　3　4　5
17. 友達と本音を言い合うことで、傷ついても仕方ない……1　2　3　4　5
18. 少しぐらい傷つくことがあっても、自分のありのままの姿で接したい
……1　2　3　4　5
19. 友達とは何でも本音で話し合うようにしている……1　2　3　4　5
20. みんなに好かれていたい……1　2　3　4　5
21. 友達に自分を理解してもらえないと自信がもてない……1　2　3　4　5
22. 友達とは少しくらい傷ついても本当のことを言い合いたい
……1　2　3　4　5
23. 友達と本音で話すのは避けている……1　2　3　4　5
24. 友達と分かり合おうとして傷つきたくない……1　2　3　4　5
25. 友達と本音でぶつかり合っても、自信をなくしてしまうことはない
……1　2　3　4　5
26. みんなと意見を合わせようと思う……1　2　3　4　5
27. 友達にはありのままの自分は出せない……1　2　3　4　5
28. 友達とは、互いに傷つくような本音での話はしないようにしている
……1　2　3　4　5
29. だれにでも好かれるのは無理だと思っている……1　2　3　4　5
30. どんな友達とも協調し合いたい……1　2　3　4　5
31. 傷つきたくないので、友達には本当の姿を見せられない
……1　2　3　4　5
32. みんなと意見が違っても、できるだけ自分の意見を言うようにしている
……1　2　3　4　5
33. 友達と本音でぶつかり合っても平気である……1　2　3　4　5
34. 友達と本当の姿を見せ合うことで、少しくらい傷ついてもかまわない
……1　2　3　4　5
35. どんな人ともずっと友達でいたい……1　2　3　4　5

以上です。ご協力ありがとうございました。